

会報
45号



函館の歴史的風土を守る会会報
No.45 H 5. 10. 15
発行所 函館の歴史的風土を守る会
事務局 函館市五稜郭町43-9
五稜郭タワー株式会社内
電話 (0138)51-4785
印刷所 双葉印刷 電話 53-7730番

木曾妻籠宿から

(財)妻籠を愛する会 理事長 林 文二

昭和43年に発足した、妻籠を愛する会も、幾多の変遷を経て、四分の一世紀を数えるに至った。町並み保存の草分けの住民運動体として、広く世に知られ、なんの変哲もない、谷間の廃村寸前の過疎部落が、今や町興しの奇跡とも称される、年間100万人に近い観光客を誘致する観光地として蘇ったのである。そのサクセス物語については、様々なメディアを通して語られているが、その発火点となり、町並み保存の原点となった、寺下地区の、土地に触れ改めて、町並み保存の土地問題について考えてみたい。

昭和36年頃国道19号線（旧中山道）から伊那谷、飯田市に通ずる国道256号線（旧大平街道）拡幅工事が計画された。当時3箇村の町村合併により妻籠から、役場、中学校も、隣村の読書地区に移転、疲弊のどん底にあった妻籠の人たちは、よそに土地を求めて、逃げ出す計画する人が出たのも無理からぬ状況であった。寺下地区も国道計画案として浮上し、移転補償を得ての移転派と、戦後の我が国初めての公民館活動に端を発し、藤村文学に連なる文化人に示唆を受けた歴史と町並みの美に、なんとなく目覚めた、妻籠資料保存会のメンバーを中心とする保存派の間に熾烈な論争があったのである。しかし幸いなかな、この地区の土地は全面その名のとおり宗教法人光徳寺の寺領であったのである。従って幾許の補償も期待できず移転派は鳴りを潜め、国道は川向こうを通り、数年を経過、昭和43年長野県明治100年記念事業により、寺下地区26戸の解体復元工事が行われたのである。



寺下の町並み 南側から見た所

「クレオパトラの鼻」のたとえのように、歴史的事実には常に仮定的問題が付きまとうものである。もしあの地区が私有地であったら今日の妻籠宿はなかったかも知れない。

さて第二の妻籠の土地問題の危機は今年3月、函館市主催の「歴史を生かすまちづくりフォーラム」にお招きいただき、述べたとおり、昭和56年頃、旧中山道筋の企業の倒産による土地競売問題が起こり、此の危機意識が起爆剤となり、昭和58年「妻籠宿保存財団」が設立されたわけである。幸い此の土地は南木曾町と個人の献身的買収により事無きを得たが、土地が私有で商品である限り、このような問題は永久に付きまとうことは覚悟しなければならない。

さて私共も「全国町並み保存連盟」を結成20年近くの歳月が流れた。当初は歴史的環境、建造物の破壊に対する反対、抵抗運動が主力であったが、毎年全国各地で町並みゼミを開催、国、地方行政においても町づくりの核として、市民権を得、当時共に運動をした若い学生の皆さんもその道の権威者として、教授、助教授につかれるなど、誠に感慨深いものがある。

今年の第16回川越ゼミも700人余の参加者を得て盛況裡に幕を引く事が出来た。

しかし土地のことに思いを馳せるときそんなに喜んでばかりはいられない。その典型的の例が、我が国の古都京都にある。第13回京都ゼミでも問題になったが、京都の代表的な町祇園町界隈も、四条通りの北と南では町並みの表情がまるで違うのである。南側祇園甲部は木造二階建てのお茶屋が並び、一方の北側はおよそ町並みとは縁遠い、不揃いな現代建築群が並んでいるのである。南側の土地のほとんどは、学校法人、八坂女紅場学園の所有地で地上げ屋の進出もなく、京都にふさわしい町並みを守る、強力な指導がある由で、一方北側の土地はそのほとんどが私有地のため、その地主の勝手気ままの奇怪な現代建築群が立ち並び、我が国を代表する世界の古都京都が此の有様である。13回京都ゼミの難しい問題山積の重苦しい雰囲気は忘れられない。今日の新聞によれば全国の地価も、沈静化し、特に大都市商業地での大幅の下落を報じている。しかし大都市圏の地価は依然として高く、地価、借地権にかかって来る、固定資産税、相続税の酷税は容赦なく小市民に襲いかかり、長年住み慣れた家を捨てて移り住まなければならない悲劇が各地で見られることが報じられている。まさに町並みの破壊、文化の破壊である。このまま進めば妻籠の様な片田舎の町並みしか残らないことになりかねない。毎日妻籠を訪れていただく観光客の列を見ていると、失われていくものへの、憧憬と抗議の巡礼の列と見るのは、筆者のあまりにも身勝手なセンチメンタルな思い過ぎでしょうか。町並みも、自然景観もすべて土地の上に成り立っている当たり前の事実をもう一度噛み締めて私達の運動も、ナショナルトラスト運動と手を携えて第二幕目の運動を展開しなければと思っている。

(全国町並み保存連盟、会長)

第16回 全国町並みゼミに参加して

武州川越町並み博～あれから百年・これから百年

函館市都市景観課 鈴木 宏

例年、初夏に開催されていましたが「町並みゼミ」も、今回は立秋の8月21日から3日間の日程で、蔵造りの町並み、また小江戸として全国に名高い埼玉県川越市で開催されました。川越は明治26年に大火があり、町の3分の1以上を焼失しました。その後町の復興にあたり、日本の伝統的な耐火建築である土蔵造りが採用されました。以来、蔵造りの町並みが形成され、今年がちょうど百年目にあたる記念すべき年であります。今回で16回目を数える町並みゼミは、全国から約700名という多勢の参加を得て、多彩なテーマのもとに討論を繰り広げました。



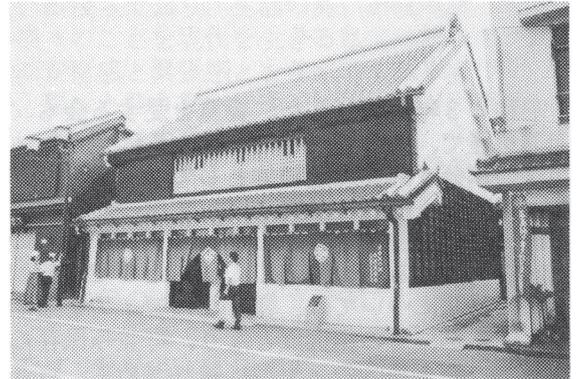
(川越蔵造りの町並み)

初日に行われた各市民団体の代表者による各地からの報告では、熱のこもった力強い発言が印象的でした。その中で、すでに町並み保全の制度を整え、一定の成果をおさめつつあることが報告され、町づくりの主体は住民であるという原点を再認識しました。

2日目の午前中には町並み見学会がありました。30度を超える暑さの中にもかかわらず、地元シルバー人材センターの方々による一生懸命なガイドは今も忘れません。実際に歩いてみると、川越は城下町を礎に発展してきた都市で、「小江戸かわごえ」と呼ばれるにふさわしい歴史・文化・伝統の香りが市内の各所に今も息づいているように感じられました。また電線類の地中化も見逃せない点のひとつでした。

午後の分科会では3つのテーマに別れ、具体的な検討をしました。私は第1分科会「町並み博品館」<伝建地区のこれまでとこれから…>に参加しました。全国から7名の講師を招き、川越を含めた多くの歴史的町並みが、文化財保護に定められた伝建地区選定の申請に踏み切れないという実態を踏まえ、伝建地区をより身近な制度としていくためにはどのようにすればよいのかが話し合われました。討論では、伝建地区の選定が、さまざまな緩和・優遇措置が用意されている反面、規制の厳しい窮屈な制度であるという先入観が住民にとって近づきにくくしているという問題が指摘さ

れるとともに、伝建地区制度そのものも地域の多様な実情を包含する柔軟性を有すべきことが主張されました。



大沢家住宅（重要文化財）寛政4年（1792）建立

なお第2分科会「都市でざいん館」<歴史的街区のまちづくり>では、函館市都市景観の山本真也主任技師が講師として出席しました。

その他にも、映画監督・斎藤耕一氏と歌手・刀根麻理子氏の「記念対談」、夜に開催された「懇親会」や7つの「小粋な夜の勉強会」、3日目に行われた川越にゆかりの深い馬場璋造氏、永井多恵子氏、福川裕一氏による町並みの未来を語る「トークセッション」など、どれをとっても印象に残るすばらしい企画でありました。

川越市は一方では工業都市としても栄え、現在人口30万人を超える県内有数の都市としても発展しています。その結果、都市化の波にさらされ、町固有の歴史的景観を失いつつあります。そのような中で、歴史的町並みや数多くの文化遺産を大切にしながら新しい町との調和を図り、快適な町づくりを進めていくことが求められています。そのためには行政指導という規制的なものではなく、住民の方々のみずからの手で一体となって、川越の蔵造りの町並みをいつまでも大切に保存してもらいたいと願います。



原家住宅（市指定）明治26年（1893）5月24日 建立

会津探訪記

古稀庵 岡田 悌 輔

7月下旬であった。丁度、私の所有している伝統的建造物“古稀庵”の著しい老朽化に伴い、経済的に現状修復の困難さに直面し、一部（裏の宿泊に利用している部分）を解体した上でRC地上三階地下一階の改造を計画しました。しかし乍ら、木造建造物の保存と建築基準法、消防法との整合に苦慮し、相続をも含めた次代へのバトン・タッチを如何にしたらよいかを摸索していた折、永田史明氏より会津に行ってみないかとの誘いがあり、何か参考になるものがあればと陳有崎氏と三人早朝の函館を出発した。保存とは他に有機体としての町の姿、そこで営まれている生活、そしてどのような空間が生みだされているのか、つきぬ興味があつた、又対応している行政の姿勢と支える市民意識及び所有者の想いをも見つめてみたかったのである。

最初に蔵とラーメンで近年話題になっている喜多方市を訪れました。人口37,000人のこの町に、なんと3,000戸位の蔵が残っているとのことにはまず驚かされました。ここで、永田氏の友人である都市+建築総合研究所U+A代表五十嵐竹義氏と落ち会い、氏の案内で大和川酒蔵をはじめ色々な蔵を見て回りました。五十嵐氏はこの地域の修復・移築を多数手がけていると、まさにこの地域の生き字引のような存在であった。この町の蔵は想像していた以上に大きく立派な木骨レンガ造り、及び石造りで、あるものは、商店に、工場に、住宅にごくあたり前のように利用されていた。移築（ひきずり）も日常茶飯事のように行われていることに驚きました。

しかし、この町の中心街は、蔵の前面を新建材で覆った商店街、その前にあるアーケードに意識の違いを感じた。蔵を新建材で覆ったりアーケードを設置し

たりすることが、新しい町づくりと考えていたようである。そこに降って湧いたような蔵のブームが起り、最近展開されている店は必要以上に蔵を前面に出した観光みやげ店の羅列に辟易する程であった。

次の日も、五十嵐氏に御案内戴き、会津若松市を訪れた。鶴ヶ城で有名なこの城下町は往時の面影は点在しているものの、町並みにあまりピジョンを感じずことは出来なかった。この地の保存活動の主的存在である会津葵、会津復古会の大肝煎でもある五十嵐大祐氏を訪問、保存活動の苦心談を伺った。七十才の年齢を感じさせないバイタリティに私自身、反省させられました。五十嵐氏の所有している西遊館も、取り壊しの決まった建物を丁寧に解体し、他の廃材と共に再構築した建物であり、今後、函館でも考えて行きたい手法と思いました。

又、茅葺の集落、大内宿（伝建地区）へも御案内戴きましたが、確かに集落は残っており、電柱も地下へ埋設、自販機も見えない場所に置いてある意識は、肌で感じたものの、そこにも生活の魅力は余りなく、同じ商品を扱うおみやげ店と併設する民宿の羅列であった。観光に頼らなくてすむ自立の方法が若しあったら、さぞすばらしい町並みが残せるのではないのだろうか……と。

総じて、今回の旅行で改めて痛感したことは、社会的建造物としての責を負っている建物の保存問題は、所有者の生活を抜きにしては不可能であり、更に加えて各種の租税、改修時に際しての建築基準法、改修資金と返済方法など、保存理念と共に新たな方策への必要性である。単に、安っぽい観光地化した町並みにしないためにも、今からでも遅くはない。当函館市では、次に続く世代のために、どのような町を作ってゆくのか。具体策ときちんとした理念を持つべきではないだろうか。（れきふう会運営委員）



再活用の大先輩 会津復古会大肝煎
五十嵐大祐氏を囲んで
左から二人目、大祐氏
右端 筆者

会津若松旧西遊館2階にて
ここからお城の堀がのぞめて素晴らしい

異 国 見 聞 記

函館市都市景観課技師 山 本 真 也

シンガポールと香港、この二つの都市が私にとって初めての異国となった。

市の職員海外派遣研修の一員として、8月末から9月にかけて約一週間の日程で訪れたのだが、現地で撮った写真などをながめながら、二つの異国の不思議さを、あらためて反すうしている。

1 “不自然”なシンガポール

“不自然”といってしまうのは、シンガポールの人にとっても失礼なのだが、いま思いおこしてみても、この都市には何かわりきれない不自然さがつきまとう。

シンガポールはとても奇麗な都市国家だ。

町並みは整然としていて、公園などの管理もすみずみまでゆきとどいている。

街中でのゴミやタバコなどのポイ捨てやツバをかくことにまで罰金が科せられ、公共の場での喫煙にも罰金と、徹底したクリーン作戦がみごとに成功している。

交通の混乱が予測されればすぐさま車の総量規制を行い、都心部への進入を有料化してみせる。

計画的かつ着実に達成されていく幹線道路や、丹下健三をはじめ世界に名だたる建築家たちの作品が建ち並ぶ都心部の超高層ビル群も、この都市国家の強い力を感じさせる。

都市の全体にわたって、国家の強い管理とコントロールがはたらいっているのだ。

現在の日本において都市の計画を行おうとする者にとっては羨望の的である強い都市管理の力を、シンガポールは強力な国家権力のもとで獲得している。

1965年にマレーシア連邦から独立してからのこの都市は、リー・クワン・ユー（元首相）という強力な政治家の徹底した合理主義のもとで、特異な道を歩む。

社会における能力主義は、教育の場での選別はもとより、一時は能力ある女性の多産奨励と他の女性の避妊奨励にまでいきつこうとしたという。

このように、すべてを合理的(?)に管理・コントロールし、狭い国土や限られた資源の中で、最大限に国家の成長を迫及しようとする指導者の意図は、一種とても明快ではあるが、私たちには理解しがたいものだ。

その明快さと不可解さは、都心部の超高層ビル群や郊外の整然とした高層住宅群の姿にもにじみ出ている。

このようなシンガポールも、近年になって歴史的地区の保存・再生を進めている。

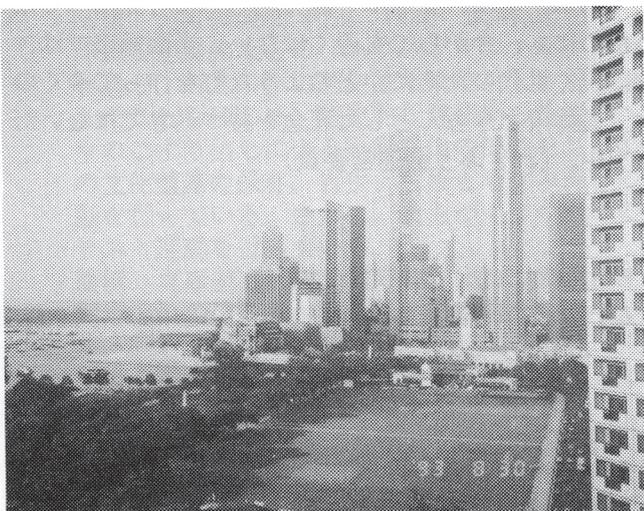
それも強力な国家権力のもとで、ぐいぐいと進める。淡路島程度の面積の都市国家で、保存建物5,200件、さらに1,500件を現在申請中という。

近代的超高層ビル群と道路一つ隔てたところのスラム化した歴史的地区を、文字どおり“奇麗さっぱり”と再生してみせたりする。

それは、近代合理主義の徹底で無性格化する都市に、今一度アイデンティティを回復しようとするものであるのだが、どこかに無理が生じているのかもしれない。

元はそうとうアクが強かったであろうそのあたりは、個性的でありながら無機質な、不思議な光景をつくり出していた。

やはり、どこか不自然なのである。



シンガポールの都心部の風景



チャイナ・タウンのショップ・ハウス（シンガポール）

2 “混沌”の香港

シンガポールから香港に着くと、なぜかほっとした。香港はそんなに奇麗な都市ではない。

全体に雑然としていて“混沌”という言葉が似合う。その混沌に、不思議に安心感をおぼえた。

函館と同じ値段(?)の100万ドルの夜景も見た。

それは高層ビルの窓灯りの集合体のようなものであって、全体に函館のような温かみのある生活感は感じられないが、個々の光には力があつた。

香港の魅力は、管理からはみ出た個々の持つ、狼狽でありながら強い生命力を感じさせる、圧倒的な表現の集合体であるところだ。

考えてみると、シンガポールには国家の強い力は感じられても、香港のように個々が放射する生命のエネルギーのようなものを感じることができなかった。



香港の100万ドルの夜景

しかし、その香港でも、一種魅力的な“混沌”が少しづつ排除されているのかもしれない。

“九龍城”は、香港の混沌と狼狽さを代表する地域であり、魔都・香港の縮図であつて“無法地帯”というにふさわしい地域であつたという。



九龍城の解体風景（香港）

その九龍城の解体が、もう終わりにさしかかつていて、うわさに聞いた壮大な空中カスバの威容も、ほとんど姿を消していた。

そこに凝縮されていた“混沌”が、何処へ散らばつていったのかは知らないが、周囲では虚ろな眼をした老人たちが、崩れ行く九龍城を無言で見つめていた。

香港も、1997年の中国への返還を前にして、大きな転機を迎えているのかもしれない。

3 そして函館

今回私が訪れた二つの都市は、いずれも自由貿易都市であり、国際観光都市と呼ばれる。

そこでは多くの金や物が行き来し、多くの人が行き交い、異なる文化がぶつかり合いつつ混じり合う。

そこから生まれるエネルギーが、都市の大きな活力となっている点で、二つの都市は共通している。

それを片や強力な国家権力のもとでコントロールし、片や個々のエネルギーの発散するに任せているのだ。

その差は別として、二つの都市の持つ特有のそしてとても大きなエネルギーを、正直うらやましく思った。

函館もかつては諸外国文化の流入の窓口であり、同種のエネルギーを多く持っていたはずなのだ。

函館がかつて持った、異文化の交流する都市としての、あの特異なエネルギーをもう一度獲得する必要があるように思う。

そのエネルギーを、この二つの都市よりも、きっと函館は使いこなせるだけの資質を持っている。

最後にちゃっかりコマーシャル

=都市の景観を語ろう=

『函館景観ウォッチング&フォーラムⅡ』

開催のご案内

日時 平成5年12月4日(土)

・はこだて景観ウォッチングⅡ

10:00~12:00(9:45五稜郭タワー前集合)

・はこだて景観フォーラムⅡ

13:15~17:00

場所 ・はこだて景観ウォッチングⅡ

五稜郭タワー前集合(市内バスツアー)

・はこだて景観フォーラムⅡ

五稜郭タワー2階会議室

主催 函館市

参加費 両行事とも無料

連絡 事前申込

函館市都市景観課まで TEL21-3388

お誘い合わせの上、是非、ご参加下さい。

開港4都市景観会議に参加して

函館の歴史的風土を守る会
事務局長 工藤 光雄

藤 光 雄

江戸末期の日米修好通商条約で開港した、函館・横浜・長崎・神戸の市民団体が、市民主導のまちづくりを話し合うため、神戸市景観形成市民団体協議会（会長 浅木隆子）から、市教委を通じ、函館のまちづくりの活動をしている市民団体3団体の参加要請がありました。

開港都市であり、また、海と坂のまちという「神戸」と類似の歴史性や自然条件をもつ「函館」「長崎」「横浜」で活動をしている市民団体と「まちづくり」と「景観形成」について意見交換をしてきました。

当市からは、当歴史的風土を守る会をはじめとして、元町倶楽部、函館市伝統的建造物群保存会からそれぞれ1名が参加しましたが、その概要について紹介します。

★プログラム

8月31日 現地見学ツアー
(14:30～16:30)

○岡本地区、北野山本地区（伝建地区）、南京町、旧居留地地区をそれぞれ見学しましたが、各地区でまちづくりの活動をしている方々の案内・説明を受けてきました。

9月1日 シンポジウム
(9:30～12:30)

○基調講演 陳舜臣氏
「日本における居留地の都市発展や文化形成に果たした役割」と題して、違った習慣を持った人が集まることによって刺激し合い、エネルギーが生れたとし、そのことが、国際交流の芽生えとなり、近代化を促進したとの提言があり、感銘を受けました。

○パネルディスカッション（各都市からの報告）

・函館 元町倶楽部 代表 村岡 武司氏
洋風の建築物などの「ハウスウォッチング」活動を通じ、古さの中に歴史的な素晴らしさを再発見したことをはじめ、歴史的な建築物の外壁のペンキのこすり出しによる色彩文化の調査をし、函館の文化遺産の保存、再生、活用と町並み保存の活動を行っている。さらに、まちづくりのためのトラスト運動を行っている。

・横浜 馬車道商店街共同組合 山口 和昭氏
開港横浜の伝統を生かした文化性豊かなまちづくり、緑と太陽のあふれる歩行者空間の創造、人間交流の街を目ざすことを目的に、市と連携してまちづくりに取り組んでいる。

・長崎 山手地区まちづくり地域団体 橋田 克男氏
旧居留地である南山手地区のまちづくりを考える会として発足、景観形成地区の指定にあたっては地域住民の代表として、景観形成基準等の作成・

検討を行ったほか、まちづくりの先進都市の視察研修やまちづくり、町並み保全・育成の運動に取り組んでいる。

・神戸 旧居留地連絡協議会 野沢太一郎氏
神戸の居留地は、さまざまな国民が集まり、互いに協力し合って美しいまちを築いてきた。その精神に習い、業種の枠を超えて、会員相互の親睦と福祉を増進し、賑わいと風格のあるまちづくりを進めることを目的に、銀行や博物館から、商社、ホテルまで、さまざまな業種が意気投合し、イベント、まちづくり、景観形成と多様な活動に取り組んでいる。



以上の報告がありましたが、そのほか地元神戸の北野山本地区をはじめとする4団体から現状と今後の取り組みなどについて報告がありました。

これらの報告に対し、神戸市からは、コメンテーターとして、神戸市都市計画局計画部アーバンデザイン室長の小西阿佐男氏から、行政側でのまちづくり、景観形成に関する考え方や今後の取り組みなどについての話がありました。

最後に、コーディネーターの山本俊貞氏（跡地域問題研究所）が、まとめに入った後、主催者である神戸市景観形成市民団体協議会会長の浅木隆子氏の開港4都市景観会議「まちづくりコンベンション宣言」を採択し終了しました。なお、次期平成6年度の開催地は長崎市に決定しました。

結びに、都市景観の形成やまちづくりへの市民参加を積極的に推進し、市民主導の町並み、まちづくりを実現するために、運動や展開の方法と課題、また行政との役割などについて話し合いの場が設けられた訳ですが、地域の人々は、それなりに理解し協力することにより、安らぎと潤いのあるまちづくりが出来るのではないかと、参加した団体はそれぞれの立場で汗を流し、行政と一体となって町並み、まちづくりを展開している様子が感じられました。

函館から参加した方々は、次のとおりです。

・元町倶楽部	村岡 武司氏
・函館市伝統的建造物群保存会	渡辺 靖夫氏
・函館の歴史的風土を守る会	工藤 光雄氏
・函館市都市建設部都市景観課	齋藤 茂氏
・函館市教育委員会社会教育部文化財課	妹尾 正白氏

英国のトラスト活動見聞録

NATIONAL TRUST, CIVIC TRUST, GROUNDWORK TRUST

元町倶楽部 代表 村岡 武司

ナショナルトラストの知名度は英国でも非常に高い。美しく豊かな環境を守り続ける集団としては象徴的な存在である。しかし英国にはまだ他にたくさんのトラストが存在していて、夢のように美しい環境（日本から訪れるとそう実感する）をさらに美しくしていこうと多様な活動を続けている。今年6月、その活動の一端に触れるため2週間それぞれの地を訪れてきたので簡単にご報告しておきたい。

◆ナショナルトラスト—NATIONAL TRUST

設立が1895年でかれこれ一世紀の歴史と伝統を有する。当初の会員は100名ほどだったが、1960年には10万名、現在は185万名の会員を擁しているこの数字は英国のある主要政党の党員数を上回っているといわれている。所有する財産も土地、建物、海岸線など多岐にわたっているが、土地に関していえば英国の民間における最大の地主ということになる。この壮大な規模のビッグプロジェクトはその志もでかく「人類が次の氷河期を迎えるまでその所有財産の保全に努める」そうである。現在もさまざまな物件がトラストに寄贈の申し込みがあるが、その数が多すぎて断る場合が多いという。

湖水地方、ハドリアンズウォール、カローデンの古戦場（スコットランドにはナショナルトラストフォー スコットランドという組織が存在する）を巡ってきたが、どれもが国宝的な資産であり、その管理運営がいかにも英国的で毅然としていながらこまやかな配慮がなされていた。その姿勢を彼の国の人びとは支持しているのである。

◆シヴィックトラスト—CIVIC TRUST

「都市、農村、田園において美を育て醜と闘う」を目標に1957に発足した。

住宅地政府大臣ダンカン・サンズ卿が「机上の白紙に絵を描くのではなく、現実の荒廃し、無秩序で混乱し、泥まみれになった現実の光景に立ち向かう勇氣」をめざして創設したもの。つまり住んだり働いたりしている身近な環境の改善運動がシヴィックトラストの活動分野ということになる。1986年チャールズ皇太子がパトロンに就いたが、当時マスコミを賑わした現代建築批判もその活動の一環であろう。

このトラストの活動単位は全国に1,000を越す数で存在するローカル・アメニティ・ソサイエティとよばれる団体で、30万人の会員が登録されている。

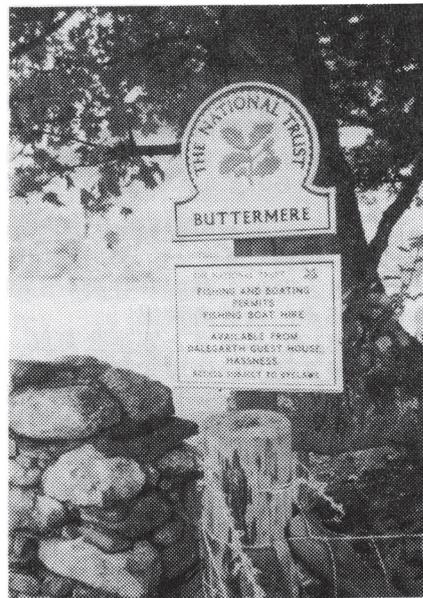
ケント州のファバッシュム・ソサイエティとマンチェスターの近くのダーウェン・シヴィック・ソサイエ

ティを訪ねてきた。ファバッシュムはフレールドリ・ヘリテージセンターという15世紀の建物があって活動の拠点になっていた。ここでこのトラストの理論的リーダー、アーサー・パーシバル教授のレクチャーを受けたのだが「過去を慈しみ、現在の美を引き立て、未来のために創造しよう」という言葉に共感をおぼえた。

◆グラウンドワークトラスト—GROUNDWORK TRUST

最初の事業が1981年だから極めて新しいトラスト活動である。リバプールの郊外セントヘレンズという町にグラウンドワーク事業団の活動拠点を訪ね、J・F・ハンドレイ博士および日本から研究員として参加している小山善彦氏らのレクチャーを受けた。リバプール、マンチェスター、リーズなどこの周辺の都市は産業革命の夜明けとともに発展し、英国の人びとがこよなく愛するカントリーサイドの美質が侵食され続けた地区でもある。行政、企業、市民の三者のパートナーシップにより豊かで美しい環境を取り戻そうというこのプロジェクトは、とくに植物学や公害問題あるいは、組織管理のプロフェッショナルなどがスタッフとして参加していて運営形態が大変興味深いものであった。

紙数の関係で本当に表層的なガイドになってしまった。いずれもっと細部に分け入った報告をさせて頂きたいものと思っているが、とりあえず今年の6月、我々も公益信託函館色彩まちづくり基金、“はこだてからトラスト”を産みおとしてしまったので皆様の理解と協力をお願いしておきたい。(れきふう会運営委員)



湖水地方、バタミヤで見掛けたナショナルトラストのサイン

“魚つり・ボート遊びが出来ます”と明示されている

北海道南西沖地震に被災して

上磯町 熊谷 明子

地震で家が壊れるなどという事態が我身に起こるとは、全く思ってもみない事でした。無残に壊れた我家を目の前にしましても、まだ信じられない、いいえ信じたくないのですがやはり現実なのです。私共の家は、四代目熊谷宇兵衛が1850年代（嘉永から安政）に建てたものと伝え聞いております。これが間違いなければ、町家建築として道内最古に属するとか、この度の修復工事で棟札の存在がわかると建築年代が特定できるものと楽しみに致しております。140年もの間、火災にも遭わず、又道路の拡幅等にも当たらず今日あることを思います時、これは本当に稀有なことだったと感謝せずにおられません。因みに土蔵二棟は道路用地となり、昭和34年に取り壊されました。それがこのような大地震に遭おうとは……。「これを機会に新しく建て替えたなら」と何人もの人達からこの種の言葉が投げかけられました。けれども私の頭の中にはこの家を取り壊して新しい家を建てる等という考えは露ほども起こりませんでした。主人と共に古建築に詳しい方々の意見を求め、文化財としての調査を関係方面に願い設計家を頼み大工さんを探して資金の手当てに奔走しました。無我夢中のこの2ヶ月間は只々この家を後世に残したいの一念からで、この家にどのような価値があるのか専門的なことは私には解りませんが、木と土と紙だけで造られているこの家が好きなのです。太い柱

や梁の黒と白い壁のもたらす調和の美しさ、又高く広く大きな空間のもつ解放感がとても気に入っております。他人様から見ると朽ち果てそうなこの家のどこがそんなに良いのかと思われるかも知れませんが、五代にわたって住み継いでおりますと、そこそこに遠い先祖の思いが残っており、生活の臭いが浸み渡っていて、それが様々のことを現代を生きる私共に語りかけ何とも言えぬ安堵感と緊張感とを与えてくれるのです。親から子、孫へと語り継いでゆく中で、家という器の果たしている役割は小さくないと考えます。多くの人の幼い日の思い出の中に、囲炉裏や土間、縁側など今では数少なくなってしまった田舎の祖父母の家というのがあると思いますが、人はそれを語る時、とても優しく良い表情をするではありませんか。それ故修理し保存することに何の迷いもありません。しかし、これを守り通す為には又多くの困難が伴います。最も大きなものはやはり経済的な問題です。専門家に見て戴きましたら、すっかり修復するとこの後更に300年はもつそうです。しかしそれには億単位の費用が必要とのこと、個人の力には限界があり、とても出来る相談ではありません。いかに愛着が深く且つ大きくともそれだけでは維持は困難とこの度の震災で思い知らされました。いづれ公の力を借りる時が参りましょうが、その時迄、微力を重ねてゆくつもりでおります。

第13回ふるさと写生公募展入賞者

事務局だより

- ☆ 6月30日 平成5年度定期総会終了報告発送(資料) 会報44号発送
- ☆ 7月3日～4日 函館からムーブメント・ウィーク 93公益信託函館色彩まちづくり基金、認定記念式典 & シンポジウムが金森ホールで開催、会長他会員出席、関連行事①町屋ペンキ塗り替え、②町並みウォッチングに参加。
- ☆ 8月21日～23日 第16回全国町並みゼミ川越大会(於川越) 函館からの出席者山本真也・鈴木宏両氏(市都市景観課)
- ☆ 8月31日～9月1日 まちづくりコンベンションin開港4都市会議(主催神戸市景観形成市民団体連絡協議会 共催神戸市)が神戸市で開催。概要別掲
- ☆ 9月2日 環境美化「函館山サミット」が函館山展望台イベントホールで開催されました。会長が出席しました。
- ☆ 9月5日 セミナー「モースの見た函館」が五島軒で開催、会長始め会員が出席しました。
- ☆ 9月24日 第13回ふるさと写生公募展審査会(五稜郭タワー) 応募作品 785点、入賞者別掲
- ☆ 9月30日～10月5日 第13回ふるさと写生公募展(和光6F)(10月2日午後3時30分表彰式和光6F)
- ☆ 10月1日～2日 水際フレンドシップ会議 '93全国ウォーターフロントサミットイン福岡に工藤事務局長・浜田昌夫運営委員が出席します。

＝編集後記＝ 妻籠の林会長他ご執筆の皆様へ深謝申します。当代名うての書き手であると共に超お忙し氏達ゆえ、何時発行できるものかと嘆息……よい会報ができ安心しました。(田尻)

賞	氏名	所	属
函館市長	明 裕 美	港中	3年
函館市教育委員会	國 安 秀 隆	港小	2年
函館市美術教育研究会	布 施 和 洋	亀田小	6年
朝日新聞社	川 崎 真 紀	宇賀の浦中	1年
毎日新聞社	住 谷 拓 人	昭和小	4年
読売新聞社	高 原 隼 希	北美原小	2年
北海道新聞社	あかいしまりこ	亀田小	1年
北海タイムス社	柴 田 正 和	亀田小	4年
NHK函館放送局	三 浦 史	深堀小	6年
	増 田 桂 子	港小	3年
HBC函館放送局	西 村 勇 太	港中	3年
函館プロモーション ビューロー	中 居 大 祐	北美原小	6年
	場 谷 司	金堀小	5年
函館の歴史的 風土を守る会	吉 田 知 文	東川小	2年
	安 東 瀬 里 奈	北美原小	3年
	長谷川 高 文	港小	3年
	山 内 恵	港小	3年
	三 瓶 隆 太	千代田小	3年
	高 橋 仁 幸	東川小	4年
	石 田 定	金堀小	4年
	戸 田 寛 子	亀田小	4年
	野 登 将 志	昭和小	4年
	阪 内 彩 香	亀田小	5年
	山 本 友 紀	北美原	5年
	徳 田 晋 也	金堀小	5年
	古 田 兼 聖	金堀小	5年
	石 井 朝 子	深堀小	5年
	水 島 可 奈 子	深堀小	6年
	田 中 理 絵	金堀小	6年
	田 村 良 子	深堀小	6年
	山 田 美 香	亀田小	6年
	寺 井 玲 雄	深堀小	6年
	石 橋 玲 奈	深堀中	2年
岩 井 ゆり子	深堀中	2年	

表彰式を平成5年10月2日土午後3時30分より、公募展会場(和光6F)にて行いました。